

社会保障制度に関する若者の考え

菊地 智央

本卒業論文のきっかけは、ゼミで学生納付特例制度に関するアンケート調査を行なったことであった。その結果では、多くの学生が、公的年金制度に不安を感じていた。

そこで、本卒業論文では、本大学を含めた隣県大学 5 校と専門学校 1 校の計 6 校を対象にアンケート調査を実施し、学生が社会保障制度の何に不安を感じ、どのような考えを持っているのか、社会保障の講義の受講有無での相違や、大学によってどのような相違があるのかを考察した。また、不安を感じている原因を解明し、アンケート調査の結果を通して、若者の視点から社会保障制度の解決策を論じている。

結果として、多くの学生が社会保障制度に不安を感じていることがわかった。学部や学科が違っても、学生は公的年金制度に不安を感じており、「制度が継続するのか」「十分な年金はもらえるのか」などの理由が挙げられた。

しかし、「若者の負担が増える」や「公的年金を支払っている」など間違っただ理由も挙げられた。負担は保険料を支払っている全ての者が負っており、若者だけの負担が増えるわけではない。また、現在支払っているのは保険料であって、公的年金を支払っているわけでもない。以上より、筆者が導き出した結論は、社会保障制度への理解度と知識度が低いために、安心感が低下し、不安が生じる。この流れが、若者が社会保障制度に不安を感じる理由ではないかというものである。

今後の解決策としては、1つ目は、社会保障の必修化である。学ぶ場が不足していることで知らずにいる人がいるのではないか。そのような点から、社会保障を必修講義とすべきだと考える。2つ目は、社会保障の早期学習である。高校や中学校の頃から深い学びを行い、正しい知識を身につけることが必要であると感じる。社会保障制度が誰に対しても安心を提供するためには、1人1人が正しい知識を持つことが重要である。